

模 造 の 愛

— 『エヴァ』を読む —

梶 川 忠

Amour Artificiel

une Lecture d'*Eva* de Chardonne

Tadashi KAJIKAWA

Romancier du couple, Jacques Chardonne (1884—1968) examinait les multiples variations de la météorologie conjugale. L'amour "inscrit dans la durée" est un sentiment beaucoup plus vrai et riche que la passion. *Eva ou le journal interrompu* (1930), un de son plus célèbres romans, traite un époux qui cherche l'absolu romantique. Mais à mon avis, il s'agit essentiellement de comment composer une oeuvre.

「山あらしのジレンマ」という言葉がある。冬の寒い日に山あらしのオスとメスが互いに暖めあおうとする。ところが近づけば互いを棘で刺してしまう。離ればこごえる。何度も繰り返したあげく、ようやく山あらしたちは、互いにそれほど傷つけず、しかもある程度暖めあえるような距離をみつけどす。

「夫婦小説の作家」といわれるジャック・シャルドヌ (Jacques Chardonne, 1884-1968) の小説に登場する夫と妻は、それぞれの作品において、日常生活の摩擦の試練とそれに対する抵抗力が分析される。外部からの事件はほとんど発生せず、現実の夫婦生活の重みが、風俗描写もなく劇的な展開もない物語のなかで、点描されてゆく。いささか気取った箴言風の文体で、日常生活の物質的で些末的な要素を排除し、魂のおののき、高尚な面、微妙な不協和音といったものが描出されるのである。家庭の愛情が、「深刻で偉大な主題、おそらく永久に変わらない唯一のもの」⁽¹⁾ (P.32) 《un grand sujet, profond, et le seul peut-être qui soit éternel.》だからである。

だがそれらはこまやかで、みがかれて、行き届いてはいるけれど、机上の心理学であり、卒読したのでは退屈である。

拙論で取り扱うことになる『エヴァあるいはとぎれた日記』(1930)も日常生活における愛情の困難さがテーマとなっている。相対的なつましい幸福に自足できず、ロマンチックな絶対を渴望した男ベルナルの悲劇が描かれる。近づきすぎて血塗れになった山あらしである。

「……愛する女には人はすべてを許してやる。それによって愛はとても息苦しくなる。」(P.127) 《... On pardonne tout à la femme qu'on aime. C'est cela qui rend l'amour si étouffant.》こうベルナルが日記に記すとき、妻のエヴァは入院しなければならないほど精神を病んでいる。日記内に並べられる御託と現実との間にはそれほどの乖離があるのであるが、ベルナルの筆致には奇妙なくらい乱れはない。現実とは無縁に、夫婦の愛、妻への献身などの抽象的考察が重ねられることになる。

拙論の第1章では、妻の入院、逃亡、再婚によって消滅するこの夫婦関係がもつ二重性が検討される。日記と称しながらも、反省・思索帳でしかないノートにはほみえる現実の姿を抜き出してみる。すると家庭的だがいささか神経質な妻と、彼女一筋に仕える(保護する)夫という関係の裏に、一種の地獄図が窺えるのである。人付き合いができなくなったほど精神を病み(原因には一切触れていないが、夫のせいと推測される)、ずっと夫を憎悪しつつづけている(精神を病んだから憎むのではなく、その反対と推測される)妻と、そういう妻を嫌悪しながらも見捨てることができず、返って修羅場に足を踏み入れてしまういささか自虐気味の夫が、ずるずると深みにはまってゆくのである。

そして第2章では、真実を書きとめるために開始した日記、嘘を書く小説と対比された日記が、小説と徐々に混同され、『エヴァ』の本当のテーマが、いかに小説を書くかにあることが解明されることになる。

I

『エヴァあるいはとぎれた日記』は四つの章からなっている。第一章のバリ生活では妻を愛することの歓喜が、第二章のバリ近郊のエボヌではその迷いが、第三章のスイス・ローザヌ近くのモンコルジェ村ではその幻滅が、そして短い第四章では夫婦生活の破局が描かれている。いわば場所の移動につれて徐々に悲劇の様相が深まってゆくのであるが、その根本原因として、主人公ベルナルの妻エヴァへの過度の献身があげられる。一時たりとも傍らを離れない妻に困惑（と同時に喜び）を覚えながら、ベルナルは日記の中で念をおす。

われわれの糧、喜び、平穩というべき唯一の女性に対する愛に、われわれの全生活がひたっているとき、この世界にどんな合理的な限界を定めるべきだろう。(p.79)

Quand toute notre vie plonge dans l'amour d'un seul être qui est notre nourriture, notre plaisir, notre paix, quelles limites raisonnables doit-on assigner à ce domaine ?

あるいはそのすぐ後に来る次の述懐。

独特の行動、相違する関心、個人的な趣味がもう存在しなくなるほどに、彼女が永遠の親密さ（これは離れられない二つの生活をつつにしてしまうものだ）をより深めようとするのは、正しくないだろうか。(p.80)

N'a-t-elle pas raison de vouloir approfondir la perpétuelle intimité qui fond ensemble les vies inséparables, au point qu'il n'existe plus de démarche propre, d'intérêts divergents, de goût personnel ?

二つの引用はそれぞれ on と elle を主語にとっているが、「限界を定め」たくないのも、「深めようとする」のもベルナルである。エヴァの思考や行動は、日記である以上ベルナルの目をとおすのは当然であるにせよ、ほとんど作中にみられない。だからエヴァが「深めようとする」のではなく、エヴァがそうしたがるという前提のもとに、夫が妻に近づいてゆく。いや日々の細部を描くのではなく、自己省察のみちあふれている日記であるから、一寸の行動もなかったのかもしれない。

この日記は基本的に、「私は幸福である」《Je suis heureux》(p.31その他頻出)、「私は幸福な男である」《Je suis

un homme heureux》(p.19)という命題をエヴァとの間実践しようとした男の記すものということができる。妻を愛し、妻に愛されていると信じている男が、毎日の細やかな交情を書きとめるのではなく、抽象的に家庭の幸福や夫婦の愛情について考察を重ねてゆく。だから日記が必然的にもつはずの時間性はまったくない。この中で時は流れないのである。第二章の初め、バリからエボヌに移ったベルナルは久しぶりに日記に文字を記す。

……この数行を読み返し、私は数ページ先に目をおした。これらの文章の間に三年が過ぎ去ったとは誰も思わない。同一人物が同じ調子で同時に一気に書いたようだ。(……)私自身のなかではどんな時間も経過していない。(p.64-5)

… Relisant ces lignes, j'ai jeté les yeux sur les pages précédentes. On ne dirait pas que trois ans ont passé entre quelques phrases. C'est le même accent, le même homme qui semble écrire tout d'un trait, dans le même instant. (.) en moi-même aucun temps ne s'écoule.

日記といいつつ、考察ノートであることがよくわかる。唯一の絶対的な愛である以上、唯一絶対神の神像が不変であるように、エヴァは変化してはならない。「愛する人と幸せに暮すには秘訣が一つある。相手を変えようとしてはならないのだ。」(p.26)《Il y a un secret pour vivre heureux avec la personne qu'on aime : il ne faut pas vouloir la modifier.》エヴァからの積極的な働きかけはない。それならばベルナルがエヴァを神殿に祭り上げれば、あるいは昆虫のように虫ビンでとめてしまえば、妻は不変の存在になる。ましてベルナルは、ほんのちょっとした言動から、すどくエヴァの内面を見抜けると主張するのである。妻の変化の芽はいつも摘みとることができるわけだ。

エヴァの考えやよくわからない怒りっぽさで、私を感じないものは一つもなく、彼女にあたえる結果が正しくわからない言葉は一つもなく、私に結果の予想ができず、まぎらわしてやれなかった不満は一つもない⁽²⁾。(p.20-1)

Il n'y a pas une idée, une obscure susceptibilité d'Eva que je n'aie perçue, pas un mot dont je ne sache exactement la répercussion sur elle, pas une contrariété dont je n'aie prévu les effets et que je n'aie su détourner.

相手を完全に把握しきるには、常に二人でいる必要がある。必然的に社交生活とは縁が切れ、友人たちに見捨てられる。僧院のように世間から孤立した生活が送られる。暮しを支える仕事がおわると一目散に家に戻り、エヴァとの日常を再開する。

私が部屋にいないと、彼女はまどろむこともできない。彼女はもう長いこと私とベッドを共にできなくなっているが⁹⁾、彼女の傍らにいななければならない。だから仕方なく私も早く床につく。仰向けに寝たまま、身じろぎもせず、私は目をさましている。(p.24-5)

Lorsque je ne suis pas dans la chambre, elle ne peut pas s'assoupir. Elle n'a pu supporter longtemps que je partage son lit, mais il faut que je sois auprès d'elle. Cela m'oblige à me coucher de très bonne heure. Je reste éveillé, étendu sur le dos, tâchant de ne pas bouger.

このようにエヴァに頼づくために（実際には被護するために）、ベルナルは外界との交わりを最小限に縮小した。しかし二人だけの生活は精神の緊張を強い、二人とも疲労する。互いに相手から圧迫され、精神を傷つける。「家にいると、感受性をにぶらせる不健康な気候によって急に弱ってしまうように、一語の調子にも傷つけられ、何でもないことに憂鬱になったり、幸福になったり、心をかきみだされる。」(p.31-2)《A la maison, comme tout à coup débilisé par un climat malsain qui modifie la sensibilité, me voilà affecté par l'accent d'un mot, assombri, heureux, dévasté pour rien.》びりびりと神経をとがらせ、妻に献身する裏には、自己保身がある。妻を自分の傍らに縛りつけておきたいのに、犠牲を強いる女を憎悪している。そして妻のために総てを厭わない夫の隣りに、それとなく妻を嫌う夫が散りばめられている。献身のみでなく、徐々にアンビバレンツな夫婦関係が顕かになり、夫婦についての男の側のみの考察、結婚によって男が得するものと損するものが抽象的に啓示されてゆく。

そのような表面的には隠やかで時の流れない生活に、例えば時間や日常の細部がかすかではあるが潜りこみ、二人の間に亀裂が生じるのは、エヴァがこの日記をみてからである。二人だけの閉鎖的な暮しのなかで、相手から自分を隔てる最後の砦が、この日記であった。妻の感情を分析し、そういう妻に対しての自分を考察していた日記を放置しておいた。いくらエヴァがいささか精神

を病み、夫への関心を失っているといっても、不用意ではあった。

ベルナルはエヴァが覗きこむことを期待していたのだ。時に収容所とも感じられる現在の日常を、変えたかったのである。崖上に突きだしたシーソーの上でバランスをとっていることが嫌になった。

……「エヴァのそばにいて、幸福だろうか、不幸だろうか」と、私はしばしば自分に奇妙な問いを発する。(……)私は奇蹟を待っている。人間を急に変貌させる魔法つかい、秘薬、信仰があるものだ。(……)愛する女を前にして私の全身に課される規律、沈黙、嘘、そして辛抱強く偽善的な教育者の役割、これらは私を疲れさせ、すり切れさせる。(p.85-6)

…… Souvent je me pose cette étrange question : 《Suis-je heureux ou malheureux auprès d'Eva ?》 (.) J'attends un miracle. Il existe des sorciers, des drogues, des croyances qui transfigurent un être subitement. (.) Cette discipline, ce silence, ce mensonge imposés à tout mon être devant une femme que j'aime, ce rôle d'éducateur patient et hypocrite, fatiguent et usent.

しかし妻に誠実な夫という自分に課した仮面は脱げない。そこでエヴァの方から変化をおこさせようとしたのである。「私の存在は彼女の薬品ともなり、病因ともなっている。(……)私はこのままのままでいるべきか先へ進むべきかももう判らない。」(p.86)《Ma présence est à la fois son remède et son mal. (.) Je ne sais plus si je dois rester ou partir.》とベルナルは判断を放棄していたのである。このまま現実を否定した観念の世界に住みつけるのか、嫌悪する現実と直面することで自分の世界に風穴をあけるのか。しかし観念の世界は精神の疲弊をまねくし、あいた風穴は繕おうと努めるので、大きな変化は訪れない。そう理解できる以上、ベルナルは主体的な行動はとりえないのである。

取り澄ました仮面が一度身についたなら、たとえ相手から強いられたものであっても、自分からは外せない。固定した世界の中で、世界そのものが揺れ動いてゆくのに身をまかせただけである。そして奇蹟は訪れず、社会的には二人は完全に落魄する。第三章のローザンヌ近郊の村モンコルジェでは、パリでブルジョアの暮らしを送っていたのに、庶民の貧しい生活を送らねばならない。「この世でもしかしたら彼女が完全に幸福になるかもしれない土地」(p.92)《un lieu au monde où elle serait complètement heureuse》として選択した村で、ベルナル

は小工場の会計係としてわずかな金を稼ぐだけだ。

……私は予想できなかった。早起きをし、丈夫な体になり、貧乏を楽しみ、子供っぽい指を傷めもせず百姓女のように働く活発な人間がエヴァの中に住んでいようとは。(p.100)

…… Je n'avais point prévu, chez Éva, cette vive personne levée tôt, bien portante, amusée de sa misère, travaillant comme une paysanne sans abîmer ses doigts d'enfant.

それでも元気になった妻を喜び、エヴァと一緒に不如意な生活を嬉しげに書き記す。

だがエヴァのためにベルナルのする行為は常に裏目となり、二人は追いつめられてゆく。幸不幸の小さな波があり、一時的に関係の好転することはあっても、二人は破局を運命づけられている。それを予見するかのようになり、日記には楽しげな暮しぶりをことさらに取り上げようとしている。

運命共同体が崩壊するこの雪深い小さな村で、幸福でありたいと強く願いつついに不幸になるのは、ベルナルだけである。エヴァは「完全に幸福になるかもしれない土地」で、ベルナルによってかけられていた催眠術からついに目覚め、夫の許を去ることになる。今まで二十年近い夫婦生活で、ベルナル以外とは口も利かなかったエヴァは、再会した初恋の医師ジェルマンから精神の病いを指摘され、懇切な治療を受けるうちに、現実と自己の周囲に目を向けるようになる。そして実は自分がベルナルを一度も愛したことがなく、憎悪していたことに気付くのである。

妻に逃げられたことで、夫も「彼女は決して私を愛していなかった」(p.150)《elle ne m'a jamais aimé》というがい認識とともに、二十年近い夫婦生活と、それを維持するのに費した献身がまったく無であったことを、一切を失ってしまったことを知るのである。

かつてたった一人の親友であるエチエンスが二年間の世界旅行から戻って、フランス人をこう定義したことがあった。

愛する女を一人だけ欲する。それも召使いとしてではなく、たが他国に見られるようにうまくしつけて適当に間隔をおいておく、単なる世間的な関係を結ぶだけでもない。男を理解してくれ、なんでも話し合えるような、親密な関係をもった、男と対等の女なのだ。(……) こうしたきわめて密接なつながりが、多くの悲劇をつくりだす。(p.82-3)

Il veut une femme, une seule, et qu'il aime, et qui ne soit pas une servante ou une simple relation mondaine maintenue à distance par la bonne éducation, comme cela se voit ailleurs, mais qui soit son égale, capable de le comprendre et de parler sur tout, et en rapport intime avec lui. (. . . .) Ces liens très étroits créent mille drames.

この予見どおり二人の生活は破滅したのである。

そのとき、日記の随所に書き散らしていた、小説に関する考察にスポットライトが当たり、ベルナルは単なる作中人物＝日記の筆者から一人の作者に転換するのである。

II

妻に献身的な男の日記の背後に、現実の悲惨な夫婦生活を透かし見たように、シャルドヌの諸作品に共通する、夫婦の日常生活の試練という共通項から、『エヴァ』の特質が浮かびでてきた。小説を書くとはどういう行為であるのか。一見日記を記すようにみえながら、ベルナルはこの行為を模索していたのである。

さて、妻を熱愛する男の日記というこの小説の体裁は、巻末に後書のようにつけられた文章によって(八ヶ月という時間が経過した後、日記を冷静に客観的にみる目を獲得している)、一挙に偽りのものとなり、はたしてエヴァという女がベルナルの妻として存在したのかどうか疑わしくさえなってしまうのである。

私がエヴァと名付けていた、そして私の人生をみだしていた女は、私が今想像している嘘と狂気の女とは何の関係もなかったのだ。私を捨てていった女は、もはや私の心を動かせない見知らぬ顔にたちまちなってしまった。(p.149)

La femme que je nommais Éva et qui a rempli ma vie, n'avait aucun rapport avec l'être de mensonge et de folie que je vois maintenant. Celle qui m'a quitté a pris instantanément pour moi un visage étranger qui ne peut plus me toucher.

それならばなぜこのような嘘の日記が長々と執筆されねばならないのか。『エヴァ』の冒頭で、ベルナルは様々な日記を記す理由を説明しつつ、小説の筆をとらない理由もそれとなく打ち明けている。

その前に小説や日記を含め書くという行為と女が対比されていることを確認しておかねばならない。冒頭で「……十五年前、ごく若いころに、私は小説を出版した

ことがある。」(p.17)《. Très jeune, il y a quinze ans, j'ai publié un roman.》と、特異な体験を披露した後で、文字と無縁になった動機をこう説明する。「私は幸福な男なのである。私はこの世界にある唯一の幸福もっている。私は一緒に暮している女、妻を愛しているのだ。」(p.19)《Je suis un homme heureux. Je possède le seul bonheur qui soit au monde. J'aime la femme avec qui je vis et qui est ma femme.》文字は不幸な人間の遊具であって、ベルナルには不要というのである。さらにまだ彼の観念世界が現実と無縁に存在しえた頃の感想。「愛し合っているとき、言葉はなんの意味ももたない。」(p.55)《Les paroles ne signifient rien quand on s'aime.》文字を書くどころか言葉さえ無用のものになっている。それならこの日記を何年間かつづけるのは、もはやベルナルがエヴァを愛していないことを意味している。

きょう、嘘を伝えかねない文体や作中人物を気にせず、日記を書いている。(p.17)

Aujourd'hui, j'écris un journal sans me soucier de style ni de personnages, qui entraînent au mensonge.

初めて日記の筆をとった時にこう記したベルナルは、はっきりと小説と日記を対比している。日記は真実を書きとめるものであり、本当の自己を考察するのにふさわしいものと考えられている。もっとも夫婦生活が非常に孤立したものであるように、ベルナルは閉鎖的に、観念的に、一方向からしか自分をみない。いささか疑しくなってきた妻への献身と愛情を自分に言いよこせるための、そのような疑念を書くことで霧散させるための日記なのである。もちろんベルナルは嘘をついているわけではない。彼は鏡に映った自分を正確に書きとめる。ただ鏡がゆがんでいるだけなのである。そして日記がすずむにつれ、その歪みを徐々に自覚せざるをえなくなる。

もし私の生活上の出来事を色々集めて、本当に日記をつけていたら(下線梶川)、私の頭に浮かんだすべての思想(これがベルナルが必死にしがみついていたものである——梶川注)よりももっと価値のあるものになったろう。(p.147)

Si j'avais recueilli les événements de mon existence, et vraiment tenu un journal, ce que je posséderais aurait plus de valeur que toutes les idées qui me sont venues en tête.

最初に設定したはずの小説と日記の対比は否定され、この日記は、小説を否定するベルナルの意見にもかかわらず、急速に小説と重なってしまう。そしてこれはベルナルにとって潜在的には望んでいたことでもあった。彼は十五年前に出版した小説を評価していない。他人にも認められなかった。「私の身近な人間は、私の婚約、結婚、私自身のことを書いたのだと思っていた。(……)だが私はこの小説では自分のことを語りはしなかった。」

(p.17)《Mes proches ont cru que j'avais décrit mes fiançailles, mon mariage, ma personne. (.) Je ne me suis pas raconté dans ce roman.》自分を直接的にむきだしには語らない形式である小説では、彼は成功しなかった。成功していたら、妻などには見向きもせず、文筆に打ち込んでいたかもしれない。「私はこの十五年間、何も書かなかった。しかし環境がちょっとでも別のものではなかったなら、今頃は小説家になっていたかもしれない。」(p.18)《. . . Je n'ai rien écrit depuis quinze ans, mais si de minimis circonstances eussent été autres, je serais maintenant un romancier.》潜在的にはベルナルは小説家になりたいのである。もちろん波瀾万丈の小説は彼の好みではない。処女作にみられるように恋愛小説が書きたい。永遠につづく愛が書きたいのである。「この愛はあまりに微妙なので変形には同意できないと思わなければならない。運命の急変はほとんどないし、言葉で表現されても、言葉は力を失ってしまう。」(p.19-20)

《Il faut croire que cet amour est trop subtil pour se prêter aux transfigurations; il fournit peu de péripéties et s'exprime par des mots qui ont perdu leur force.》そしてそれを表現するために、たとえ小説形式から逸脱するにせよ、「心の中でただ一度秘密のうちに演じられた内心のドラマ」(p.19)《un drame morale qui s'est joué une seule fois dans le secret et en esprit.》という形式をあえて選択するのである。これが内省日記であった。

一つの物語の流れの中で、登場人物たちが絡みあい、変貌する小説という形式を否定して、主観的表現である日記を、合わせ鏡を用いて突き放すことで、自己を客観化した。小説ではないと自分に言いよこせつつ、しかしもっとも望ましい小説を書く過程を小説化した⁽⁴⁾。

ベルナルはそれに成功する。「私には欠けていたこのドラマ」(ibid.)《ce drame qui m'a fait défaut》という「内心のドラマ」を言葉に定着することができたのである。だから小説家になったベルナルは、もう別の小説の構想を胸に秘めている。「一人の女が一人の男に与える幸福、世の中でただ一つの幸福」(p.150-1)《le bonheur qu'une femme peut donner à un homme, le seul

bonheur qui soit au monde》というテーマである。

愛する女から愛されていると信じているのに、実は錯覚にすぎず、むしろ憎まれていたという男の物語である『エヴァ』とは正反対のこの小説は、『クレール』(1931)としてわれわれの目の前にある。そして『クレール』はまた別の機会に取り扱われねばならない。

〔注〕

1. テキストは Albin Michel 版 (1983) を用い、該当ページのみを示す。

2. もっともこの引用の直前に次のような皮肉な格言が述べられているので、慧眼の持ち主なら、この冒頭近くで偽りの愛の物語であることを見抜くであろう。

特に愛している相手はまったくわれわれとは無縁だ。絶対に相手をつかめない。反対に、相手をよく知っていると思ひこみ、それが愛の悲劇的な側面の一つとなるのだと思う。(p.20)

en particulier, la personne aimée nous est complètement étrangère; nous ne la possédons jamais. Je trouve, au contraire, qu'on la connaît bien et que c'est là un des côtés tragiques de l'amour.

3. 「ベッドを共にできなくなっている」のは、ベルナルの方であろう。エヴァが性的にきわめて潔癖なのは事実である。「彼女は『卑俗な』美しさ、つまり肉欲をほめかしたどんな美しさも感じ取れないのだ。」(p.39) 《Elle ne peut sentir aucune beauté «vulgair-e», c'est-à-dire qui implique une allusion à la chair.》だがすぐ後で、「彼女のこうした羞恥心は、私には好ま

しい。(ibid) 《Cette pudeur, chez elle, me plaît.》と、いかにも不感症気味の妻に安心する口物を洩らしている。ブルジョアの厳格な教育を受け、性的なことは口にも出さない女が好ましいのは、自己の性的能力に何か問題があるせいであろう。「(夫婦の)争いは性的不一致によって説明できるようだ。実際に愛し合っている時は、この困難は容易に片付けられる。悲劇は他にある。愛情が不足しているか、愛情を望まないかである。」(p.40-1) 《Il semble que l'on pourrait expliquer par des divergences sexuelles bien des conflits. En réalité, lorsqu'on s'aime, on s'arrange assez facilement de ces difficultés. Le drame est ailleurs; c'est l'amour qui manque ou qui n'est pas ce qu'on voudrait.》エヴァは後者である。

4. ここからブルースト以降のいわゆる「小説を発見する小説」というジャンルに嵌めこむことは可能だろう。だがそういう文学史風の分類は筆者の否定するところである。過去帳にすぎない文学史から作品を救い出し、読解を重ねることで、その作品の「読み」を提示すること。今の筆者の関心はそれにもみ向いている。

なお、各種文学史の一節や評論集の一部で取り扱われることはあっても、シャルドヌに一冊をあてた書物は以下の三冊だけである。

GUITARD-AUVISTE (G.): *La Vie de Jacques Chardonne et son art*, Grasset, 1953.

—: *Jacques Chardonne ou l'incandescence sous le givre*, Olivier Orban, 1984.

VANDROMME (Pol): *Jacques Chardonne, c'est beaucoup plus que Chardonne*, Vitte, 1962.

(受理 昭和62年1月25日)